

乳幼児教育フォーラムの特別企画として、さくら保育園・中保育所・舞鶴幼稚園において公開保育を実施しました。

本公開保育は、市の事業である「乳幼児教育ビジョン推進事業 乳幼児教育の質の向上研修」における、公私・園種を越えて市内の先生方が共に学び合う公開保育を、参加者の皆様にも体験していただく機会として実施しました。

公開保育当日は、東北や九州・沖縄等、全国各地からの参加者があり、このような公開保育の方法やカンファレンスについて、「見ただけで帰ったのでは理解できていないことが多々あったので、カンファレンスは良かった。」「短い時間だったが、他園の先生方との意見交流ができ、また自分とは違った見方など参考になった。」「実際に公開園の先生方の話を聞き、共感する部分が多くあった。園に持ち帰り、保育を進めていく上で保育を見直し、職員間で共有しながら保育をしていきたいと思った。」等の感想が聞かれ、公開保育の実践者と参加者が共に保育について語り合い、学びを深めることの効果を実感してくださっていることがうかがえました。

【舞鶴幼稚園】

公開保育の様子より



・園庭では、友達と一緒に色水遊びや築山での遊びを楽しむ3歳児の姿がありました。友達とイメージを共有しながら遊ぶ中で、自分の思いを言葉で伝えようとしていたり、やりとりを楽しんだりする姿が見られました。



・4歳児は、フープでマスを作り、自分達がコマになって進んでいくという「すごろくごっこ」を楽しんでいました。役割を決めたり、フープをマスにするだけでなく道を作ってみたりと、友達と思いを伝え合い、相談し合いながら、自分達で遊びを広げている姿が見られました。

【参加者からの感想】

〈子どもの姿〉

- ・5歳児の表現活動では、飼育してきたことをもとに、自分達の経験を通して劇にしている素晴らしいと感じた。
- ・自分達が飼育した体験や、観察したことを通してなりきって動作し、それに言葉をつけていた。これは小学校の生活につながるものになっていると思う。
- ・5歳児の話し合いの場面では、トンボの表現も実際見ているから理解して言えると思った。「トンボは自由に飛ぶんだよ」は生活経験から出た言葉だと思う。
- ・子ども同士の中で落ち着いたやりとりができていたと感じた。
- ・日々の経験が遊びにつながっている。そして友達との豊かな遊びにつながっていることを感じた。
- ・友達や先生との関係がしっかりとでき、話を聞く姿勢ができていたと感じた。



・5歳児の話し合いの場面では、表現遊びの中でのトンボの飛び方について意見を出し合っていました。いろんな方向に飛ぼうという意見が出るなど、自分達で話し合いながらいろいろなことを決めようとする姿が見られました。

〈環境〉

- ・どこの部屋も流れがあり、見通しを持って安心して生活している感じがした。
- ・廊下の製作コーナーは、子ども達が普段から手にとれる環境がよいと感じた。
- ・廃材を置く場所がいろいろな所にあり、異年齢の交流ができてくると思う。その場で子どもの声をどう引き出すかが大切だと感じた。
- ・クラス便りが貼ってあり子どもの様子がよく分かった。流れの分かる提示の仕方だと思う。
- ・廊下や保育室の掲示物から、今までの保育の経過が分かるようになっており、保育を見せていただけ「なるほど、ここにつながっているんだな」と感じる場面がたくさんあった。

〈保育者の関わり〉

- ・ごっこ遊びは、子どもが自由に自分の意見を言えることを大切にされているのが伝わってきた。また、ふり返りでは友達のよい所に気付けるように言葉がけがされていて良かった。
- ・年中さんの“虹のトンネルを作りたい”という場面では、子どもの思いを引き出し、形にできるよう時間をかけて付き合うことの大切さを感じた。そのような保育者の姿も素敵だと思った。
- ・自由遊びの中では異年齢で関わって遊ぶことを大事にしておられると感じた。



【さくら保育園】

公開保育の様子より

・乳児クラスは、落ち着いた環境の中でひとりひとりが安心して過ごす姿が見られました。



・机上での遊びと運動遊びのエリアを分ける等、環境の工夫がなされていました。



・4歳、5歳のクラスでは、子ども達が考えを出し合い、工夫したり、話し合ったりする中で作り上げた表現遊びの様子を見ることができました。普段の遊びが発表会等の行事につながっていることがうかがえました。

〈可視化について〉

・子ども達が遊んでいる姿や考えたことなども展示してあることで、大人だけでなく、子ども達にとっても他の子の遊び方や考えが共有できる大切なドキュメンテーションになっていると感じた。
 ・保育内容や理解の発信の仕方がとても勉強になった。
 ・日々の遊びの様子をドキュメンテーションで伝えられていて、先生方の環境設定や子ども達に寄り添った保育を大切にされているのが分かりました。
 ・各部屋のドキュメンテーションも分かりやすく、保護者の方も安心して、園の保育を信頼される大切なことだと改めて感じた。



・2歳、3歳児クラスでは、消防車ごっこやパンやさんごっこなど、保育者や友だちと関わりながら楽しむ姿が見られました。どのコーナーも、子どもの興味や関心をもとに遊びを展開している様子うかがえました。

【参加者からの感想】

〈子どもの姿〉

・各保育室、個人や集団の活動の中で子ども達が本当に生き生きと楽しく過ごしている姿が印象的だった。
 ・それぞれのクラスで子どもの主体性が見られてよかった。「〇〇だから〇〇しよう」と自分達で考えたり、一生懸命遊びを進めたりする姿を、普段から認めてもらっているからこそ、自信を持った姿につながっているのだと感じた。
 ・子どもが、充実して楽しんでいる様子が伝わってきた。
 ・子どもが自分で遊びを選ぶ力がついていると感じた。
 ・5歳の製作劇は話し合いの中で友だちの意見を取り入れたり、自分の思いを伝えられる雰囲気がとてもよく、共感できているからこそ、子ども達主体のものができているのだと感じた。

〈保育者の関わり〉

・子ども達が安全に楽しく生活ができる環境を各クラス、年齢に応じて配慮されており、先生方の日頃の保育研究の様子がうかがえた。
 ・子どもの言葉や思いを大切にされ、寄り添われている姿、言葉かけも優しく、受容的だと思った。
 ・子ども達の気付きや言葉をとても大事にしておられるなど感じた。子どもと一緒に考えるということがどれだけ大事か、応答的な関わりを大事にしたいと思った。

〈環境〉

・それぞれのコーナーがしっかりと区切られており、遊びに集中できていた。
 ・どのクラスも空間の使い方をすごく工夫されているのが分かった。特に4歳や3歳クラスのお店屋さんごっこでは、素材なども工夫されていて、子ども達も本当に楽しそうだった。乳児クラスではゆったりとした雰囲気、心地良さがこちらまで伝わってきた。
 ・遊び場の工夫や道具についてもより発展していくような配慮があり、勉強になった



【中保育所】

公開保育の様子より

・乳児の子ども達は、安心できる環境のもとで、自分の好きな場所へ行き、好きな遊びを楽しんでいました。



・保育室は、子ども達の生活や実体験に基づいた遊びの環境作りがなされていました。



・保育者や友だちと関わりながら、見立てたり、なりきったりして、遊び込む子ども達の姿が見られました。



・遊戯室で行われていたコンサートごっこでは、踊る子達だけでなく、ライト係、幕係、アナウンス係等、自分達で役割分担をして遊びを進めていました。

・乳児・幼児を問わず異年齢で関わりながら楽しむ姿がたくさん見られました。



【参加者からの感想】

- ・子ども達一人一人の言語力が素晴らしかった。「観察眼がすごい」というところにつながると思う。
- ・豊かな活動が展開されており、小学校にもこの学びがつながってほしいと思った。小学校側がしっかり受け止めなければと感じた。
- ・興味関心から、遊びを広げたり、気付きをキャッチしたり、子どもを見る視点が磨かれていると思った。
- ・乳児、幼児共に、自分がしたいことができる環境が素敵だと思った。そのためには、職員が同じ方向を向いて保育することが大事であり、チームワークが大切なことを痛感した。
- ・子ども達の「やりたい」という気持ちを大切に、ゆったりとした環境の中でのびのびと遊んでいる姿が素敵だと思った。その遊びの中で、子ども達は自分から「やってみよう」という自立の力を学んでいるんだと実感することができた。
- ・幼児のコンサートごっこでは、0、1歳児がお客さんでなく、舞台上がり主役となって踊り始め、それを幼児の子ども達が自然な形で受け入れていた。まわりの友達(大きい子)への興味や関心が高まり、真似をしたり関わったりする姿から、生活や遊びの中で、人と関わる力の基礎が育まれていると感じた。乳児・幼児がお互いに刺激を受けながら学び合う姿に感動した。
- ・乳児期の大切さを強く感じた。小さくても自分でやりたい気持ちを育てる事が大切だと感じた。
- ・低年齢児保育が本当に温かく、家庭的な雰囲気できつろいだ空間作りがとても素敵で参考になった。



・異年齢でのドッジボールでは、少しルール理解が難しい年中児に年長児がやりながら教えていた。保育者の見守りの中で、自主性が育っていた。

〈環境〉

- ・環境設定や保育士同士の連携も上手くできていて子どもが安心して遊び込める環境になっていた。
- ・子どもがやりたいことができる環境だと感じた。ハッピールームには作った製作物、途中の製作物を置いておくことができ、「また明日もやろう」「今日も続きするぞ」と意欲的に保育所に来たいと思える。また、3、4、5歳児が異年齢で刺激を与え合える環境だった。「公開保育のための保育」ではなく、「普段の保育」というのがよく分かった。



〈可視化〉

- ・ドキュメンテーションの中で、発信だけではなく、保護者に感想を求めたり、やりとりを意図されていて、感動した。
- ・結果だけの保育ではなく、ドキュメンテーションにすることでやりとりの過程が分かりやすく、保護者の方もよく分かるだろうなと思った。



本市では年度毎に、事業のまとめとして、各研修の実施内容や、公開保育・授業を実施いただいた園・校の取り組みを報告し参加者の皆さんと情報や学びを共有するとともに、1年の事業を振り返り、学びを深めることを目的として、報告会を開催しています。

今年度は環太平洋乳幼児教育学会と共催し、市外の各関係機関の皆様にもご案内をし、「乳幼児教育フォーラム」を開催しました。

玉川大学 大豆生田 啓友教授をお招きし、子どもを主体とした保育実践と協同的な学びについてご講演いただき、さらにシンポジウムでは、本市の取り組みについて、その成果等を報告することで、乳幼児教育の質の維持・向上に向けて、参加者の皆さんと共に学び合う機会になったことがアンケートからもうかがえます。

【報告会について】

保育所・幼稚園・こども園

・各園のそれぞれの保育を見てたくさん学べた。まず、保育者の心の健康など気づき合うことは大切だと思った。子どもを主体とした遊びを考え、環境を変え、発展していく遊びをできるように工夫していきたい。
 ・子どもの発想は私たちが想像しているよりも豊かで、想像もしていないことを遊びを考え、発展していくのは面白いと思った。
 ・公開保育の報告を聞いて、どの園も「やってよかった」「学びがたくさんあった」と報告しておられたのが印象的だった。公開保育前はどうしたらいいか、これでいいか、私自身もすごく悩んでいたが、やはりやってよかったという感想はあったので、他園の報告もすごく学びにつながった。
 ・保幼小中一貫教育によってメリットがたくさんあることを改めて感じた。子ども達が進学するにあたって、スムーズに移行でき、何より一人ひとりが心強さを感じながら新しい環境に入れることに期待できる。
 ・公開保育が「できる、できない」ではなく、「するか、しないか」ではないかと北野先生が話され、それは公開保育だけでなく全てのことに言えると感じた。子ども達が主体的に遊べる環境を作るために「できる、できない」と言いつつ議論より、何をするか、どのように作っていくかを考え、話し合っていくことが大切だということを学んだ。
 ・各園の報告を聞かせていただき、「できない」ではなく、「試行錯誤しながらするという方向に」という話を聞き、本当にそうだなと思った。皆さん頑張っておられるなど感じ、「自園も！私も！」と励みになった。
 ・公開保育を通して研究が深まり、保育の

改善につながっていることが分かった。本園でも職員の意識を高め、公開保育を行っていききたい。(ありのままの姿を見てもらう意識でハードルを下げる)

・「ドキュメンテーション研修」を通して、子どもの育ちを見とる力を保育者一人ひとりがつけていくことが大切であると思った。園内研修を行っていききたい。
 ・公開保育をされた園の発表を聞いて、子ども主体の保育の良さを改めて感じた。自園でも公開保育に参加させていただいて、よいところを真似していこうと思うが、なかなか実践することができていないので、少しずつ保育を見直していこうと思う。
 ・乳幼児期からの質の向上や小・中学校への連携の大切さ、子ども一人ひとりの主体性を育む遊びや学び、学びの発展性に対する援助の大切さを実感した。
 ・それぞれの園や小学校での実践を知る機会になった。
 ・校種は違うが、小学校でも活用できそうなこともあり、勉強になった。保育園で実践されたことや実践を通してついた子どもの力を小学校でも活かしていきたいと思う。

【シンポジウムについて】

保育所・幼稚園・こども園

・どの園も色々な状況の中(人数、職員数、地域など)、様々な努力をされ、子どもの育ちを大切に保育されていると分かった。保護者としてもできる限り、協力してあげたいと思えるフォーラムだった。
 ・各保育園・幼稚園の公開保育の内容を知ることができて良かった。公開保育での第三者に見てもらふことの大切さ、保育や環境の見直し、子ども達が今どんなことに興味を持っているのかを常に考え、保育を発展していくことの重要性を改めて感じた。
 ・行事の持ち方、公開保育や子ども主体に変えていかれた他園の話を聞き、取り入れたいところが見つかった。遊びが盛り上がっていくきっかけづくりとしての園外での活動。今後の課題も色々見えてきた。
 ・ドキュメンテーションを書いていることで、大豆生田先生が見る目が育つと言われたが、日々の記録を書き、また、他の保育者のドキュメンテーションを見ることで子どもの育ちや学びを実感できていることを改めて感じた。自分の力になっていることを大豆生田先生の言葉から実感して、自分の喜びにもなった。
 ・「できないことを否定するのは誰でもできる。良いところを認める」この言葉を聞き、本当にそうだと感じた。

日々保育する中で、話すこと(職員間)を大切にしているが、その中で他のクラスのよい所、個々のよいところをしっかりと見て認め、全員がモチベーションをあげ、保育していければと感じた。

・行事のあり方が遊びの延長になるように工夫されていたり、設定(保育)をコーナーに取り入れられていた。注意してしまうような子どもの行動も、興味があるという考え方をしていたりと見習いたいところがたくさんあった。
 ・園長・職員が一丸となって、主体性を活かした保育へ変えていくことの大切さを感じた。それは大変なことだが、しっかり話し合い無理なく互いに共感、感謝しつつ保育を展開させたいと思う。
 ・保育のあり方を変えるために、保護者の理解を得る必要性を感じた。(保育者と保護者の保育感の共有)

(市外)大学・行政関係者

・どの地域でもどの園でもできるということが印象的だった。このシンポジウムで得た学びを「よかった、よかった」と終わらせるのではなく、これからどう具体的に実践に生かしていくかが重要であると思った。
 ・子ども主体の保育、公開保育、ドキュメンテーション等、やればこんな風にならなっていくんだということを実体験と共に紹介して下さり、心に何か刺さるものがあった。このような取り組みは本当に素晴らしく、どんどん広まってほしいと心から思った。
 ・公開保育のピフォーアフターを聞く機会が今までなかったのも、とても面白い内容だった。もともと素晴らしい園のよりよい質の向上を聞くこともあるが、成長ではなく転換という視点について大豆生田先生からも話を聞くことができ、すごく多くの方への変えたい、変えていこうとする意識につながったと思った。この話をもっと多くの人が聞いたなら大きな改革になるのではとも思った。
 ・市全体で同じ方向を見て進んでおられること、日本の幼児教育も未来が見えると思った。
 ・これから保育の質の向上がどんどん図られるにあたり、ファシリテーターが重要であると学ばせていただいた。
 ・2つの園の園長先生の話が具体的に、きれいごとではない本音の部分が聞けて大変参考になった。そして、その良さをまとめておられた大豆生田先生の話もよく分かった。
 ・舞鶴の取り組みを具体的に学べて、とても参考になりました。小さなことからコツコツと、幼児教育の質の向上に取り組みたい。(まずは現場のチャレンジを支援)

